

p8「スイス風マントのブロンド青年が、浅黒い顔の相棒の質問に答えるさりげない態度はまさにおどろくべきもので、ある種の質問がぶしつけで、ピントはずれで、退屈まぎれのものであることなどには、少しも気づかぬ様子であった。」

関係性の中でやりとりされる言葉には、相手に対して心地よく感じられない性質のものも多い。ニコラエヴィチの特徴の一つには、この関係性がもたらす不快に対する、おどろくべき不感症という面がある。この事実は、ニコラエヴィチという人物の本質を物語っている。彼は、関係性の上にほとんど存在していないのだ。彼は常人のように生きていない、ということだ。他者と関わり、確かに某かの技術を持ち、遺産も相続し得る歴とした主体であるはずなのだが、彼は関係性から自由な存在として描かれているのである。

この点は、ナスターシャ・フィリポヴナとアグラヤ・イワーノヴナの間で、彼がナスターシャ・フィリポヴナに駆け寄る場面でもう一度考察されなければならないだろう。

p28『「公爵、なぜだかわからんが、おれはあんたにほれちまったよ。」』（ロゴジン→レフ・ニコラエヴィチ）

p56「その瞬間の公爵の^{まなざ}眼差しはきわめてやさしく、その微笑にも、秘められた不快感など影さえも見られなかったので、將軍は思わず立ちどまって、急にこの客をなんとなくちがった見方ながめた。その見方の変化はほんの一瞬のうちに生れたのであった。」

ロゴジンはあつという間にニコラエヴィチに魅了されてしまう。レヴェージェフも然り、エパンチン家の召使いも、エパンチン將軍も然りだ。ここにもニコラエヴィチの特徴が表れている。彼は、どんな人の心をも常に魅了してやまない性質の持ち主だ。

もう一つ忘れてならないのは、彼が他者の心をあますところなく見抜く畏るべき繊細な力を持っている、ということである。

これら二つのことが表しているのは、やはり、彼が関係性から自由であるということではないだろうか。

言ってみれば彼の存在を巡って、人は他者で居続けることが出来ないかのようである。彼の内面に於いて、彼自身が彼にとって明らかであるように、他者たちも明らかなのである。同時に、他者たちは彼にいつでも魅了され、彼に引き寄せられ、語弊を怖れず言うならば、殆ど融合しようとするのである。

これらのイメージはすべて、美の特徴のように見える。

すなわち美とは、ニコラエヴィチの形象を通じて説明しようとするならば（あるいはドストエフスキーを通じて説明しようとするならば）、極めて強力な、関係性の不在の印象なのだということになるだろう。美と接する時、あるいは言葉を奪い去る美という反・経験を通して、人は、他者であり私であることをやめるのである。これが、本当の人間＝真に美しい人間、レフ・ニコラエヴィチの本性ではないだろうか。

ということは、「本当の人間」と言いながら、ニコラエヴィチの形象は、人間であることから数歩退いているということになる。ニコラエヴィチは、私たちの世界の中では、正確にその姿を捉え得ない存在である、ということになる。これはどういうことなのだろうか。

「ほんとうの」という修飾語が、決定的に人間性を奪うのであってみれば、私たちは一度として「本当の人間」として生きたことはないし、そうなることもないということだ。「本当の人間」とは、それ自体が一つのトートロジーを構成するのであって、そのような人間は人間としては決して生き伸びることかできないはずだ。

物語の上ではニコラエヴィチは、ナスターシャ・フィリポヴナとアグラヤ・イワーノヴナという二人の美の影を伴いながら、ある短い期間のロシアで生きたことになっている。これは、言葉の実質的な意味で奇跡の物語なのである。

p238「あたしまでなんだかほんとにこの人をどこかで見たような気がしてきたわ」(ナスターシャ・フィリポヴナ→ニコラエヴィチ)

p239「私もなんだかどこかであなたにお目にかかったような気がしますよ」(ニコラエヴィチ→ナスターシャ・フィリポヴナ)

レフ・ニコラエヴィチともう一人、無垢な魂の持ち主が登場する。ナスターシャ・フィリポヴナである。しかし彼女はその運命の悪戯によって、世の中の悪弊により貶められ、無垢そのものを奪われ、汚された存在だ。無垢を暴力的に奪われたことにより、彼女は世界に対する憎悪と侮蔑を産みつけられてしまい、また異常なほどのプライドに囚われている。彼女の「憎悪」も「侮蔑」も「誇り」も、無垢な世界の至上性の失墜の隠喩なのだと思う。汚された「無垢」が、ネガティブな感情に変質したのであり、「誇り」と「憎悪」と「侮蔑」を体現し続けることで、彼女はまた己に僅かに残る至上性を隠喩的に維持しているのだろう。

彼女の不幸は、とりわけ世の中の価値基準を己のものとして教え込まれている点にあるのだろう。己自身を貶める眼差しを、自分のものとして持ってしまうということだ。この視線が、さらに彼女の守備的なために過剰に否定的な感情、「憎悪」や「侮蔑」の感情を助長し、またそのために、自分には幸福になることが最早不可能なことなのだと思いますのである。

この世俗的な幸福観は、世の中の価値のヒエラルキーを維持する働きをするのだと思われるが、世間的な地位や名誉、財産などが人の幸福の淵源であるという発想を持っている。その観点からするならば、彼女はトーツキーの妾に過ぎず、その意味で性的な奴隷であったことが彼女の出自なのであるから、どんな地位とも名誉とも絶対的に無縁なのであり、彼女と関わろうとする人間もまた、皆不幸になると考えざるを得なくなる。彼女がレフ・ニコラエヴィチの求婚を拒むのは、偏に彼女が囚われているこの世俗的な価値基準と幸福観の故であろうと思われる。

しかし、魂の無垢は互いに引き合う。レフ・ニコラエヴィチはナスターシャ・フィリポヴナの魂の失墜に打たれた。彼はナスターシャ・フィリポヴナを〈あわれみで愛している〉と言う。ナスターシャ・フィリポヴナも、レフ・ニコラエヴィチを愛する。この二つの魂が互いに引き合う力はすさまじく、とりわけ無垢な魂にとっては、どんな打算もどんな他者への配慮も存在しない世界を大きく己の内に宿す存在であるから、無類の力を発揮するのだと思われる。

ただ、ナスターシャ・フィリポヴナは、世俗の世界に引きずり下ろされた存在である。そのために、レフ・ニコラエヴィチの生に対する配慮をすることが出来た。彼女が発狂したと言われるのは、この相反する世界の間で魂そのものが引き裂かれる存在だからである。一方に無垢な魂の引力があり、レフ・ニコラエヴィチへの愛がある。他方には、己の存在を汚辱と感ずる視線があり、ニコラエヴィチを他者として思いやる配慮が存在している。この二つの精神が、一人の人間の内に並び立つはずがない。

p142「くまだ先は長いぞ、まだ通り三つ分だけ生きていられるぞ。この通りを通ってしまっても、まだあの通りが残っている、それから右側にパン屋のある通りも残っているじゃないか。……まだあのパン屋まで行くには、ずいぶんかかるぞ！」

p145「さあ、そこで、あなたは梯子のいちばん上の段だけが一つ、手前にはっきり見えるように、断頭台を描くんですよ。いままさに死刑囚がそれに片足をかけたところで、紙のように白い顔

と頭とが見えます。神父が十字架をさしだすと、男はむさぼるように蒼ざめた唇を突きだしながら、それをながめているのです。そして、何もかも承知しているのです。」

この断頭台のイメージは、ナスターシャ・フィリポヴナの精神的な苦悩を言い当てているのではないだろうか。己の存在を知ってしまった人、「私」が誰であるかを明白に知ってしまった人、この人は、人間が本来持っている浮遊性というか、不定型な、時と共に変容する可能性という性質を奪われているのである。

断頭台に上ろうとする男は、己の人生を決定的に知り抜いている。彼が不幸なのは、未決定な領域を寸分も持ち合わせていないということだ。その意味は、死は決定的にやってくるというだけに留まらない。それ以上に、己の人生のすべて、己の人間性のすべてが、はっきりと意識の上に提出し得る形でそこに見て取れるということ、その明瞭性こそが、彼の人生から幸福の可能性を奪っている、ということを意味している。その点は誰も同じなのだが、通常、人はこの決定性から逃れた存在であり、逆に浮遊性なしに幸福を享受することは出来ないはずなのである。子供らしい、無限定さなしに、人は幸福であることは出来ない。

このことは、銃殺刑のイメージに付加される次のようなエピソードによって、いよいよ明らかではないだろうか。

p133「その瞬間最も苦しかったのは、絶え間なく頭に浮んでくるつぎのような想念だったそうです。〈もし死なないとしたらどうだろう！ それはなんという無限だろう！ ……… この想念がしまいには激しい憤懣^{ふんまん}の情に変わって、もう一刻も早く銃殺してもらいたい気持ちになったそうです…〉」

彼は、無限定な幸福の可能性を意識することによって、それが自分の生にとっては、最早閉ざされていることをもう一度確認するのである。これ以上の絶望の意識化はないと言って良い。そしてこの苦悩の重みは、そのままナスターシャ・フィリポヴナの意識の折り畳まれ方につながっている。彼女は、自分の生の全体について価値判断をしたことにより、自らの意志で己の幸福の可能性を閉ざす。そこに彼女の狂気が、すなわち一切の可能性を奪い去るブラックホールのような重力場が生まれているように思われる。

p381「この瞬間からナスターシャ・フィリポヴナは気が狂ったのだと、あとになって一同は断定した。」

ナスターシャ・フィリポヴナが不幸なのは、彼女が自分の存在を世俗的な価値の領域に閉じ込めて、そこから一歩たりとも踏み出すことを自らに許さなかった点にある。

人は、誰も無垢の、無限定な領域を持って生きているはずだ。子供時代を離れたからと言って、その時代の生の姿が完全に無化してしまうわけではない。それは無言のまま、私たちの背後に隠れながら存在し続けているはずなのだ。そしてその領域から人は、幸福感を汲み取るのだと私には思われる。

このような生き様をする典型例が、リザヴェータ夫人ではないだろうか。彼女はもう一人の無垢な魂の持ち主である。彼女は世間的な地位も名誉も財産も持っている。幾分変人として自他共に認める存在だが、この変わっている、ということ、それから世俗のことに誠実に苦悩し続けなければならないという点に、この人の重要な人間性の発露があるのだと思われる。レフ・ニコラエヴィチは彼女のことを「子供」として看破した。

p165「私みたいな子供があつたまるものですか？ しかし、ただ一つ正しいことがあります。私は実際、大人と、世間の人と、大きな人といっしょにいるのを、好まないんです。」

p166「私は子供たちの一団に会うたびに、なぜだか知りませんが、とても強烈な幸福感を覚え

るのです。」

「子供」のイメージは、その人物が子供じみていることや、幼稚であることを言っているわけではない。そうではなく、人間の幸福の所在を言い当てているように思われる。「子供」が隠喩として働く時には、それは、その人物が浮遊する意識を可能にする、子供らしい無限定な領域に向けて、己の身を任せることが出来る、意識を開くことが出来る、という意味合いがあるように思う。

この点については、スイスで子供たちに慕われたレフ・ニコラエヴィチと、コーニャと親しく交わることの出来るリザヴェータ夫人に共通の性質であろう。二人とも変わっていると評され、「子供」だと周りから見られる存在だ。

p173「美しさを批評するのはむずかしいことです。私にはまだその用意ができていないのです。美しさというのは謎なぞですからね」

人から関係性を奪う力を持つ美の化身とでも言うのだろうか、レフ・ニコラエヴィチとナスターシャ・フィリポヴナの存在と比較して、アグラヤ・イワーノヴナはどうだろうか。彼女もまた絶世の美女である。そのためなのだろうか、レフ・ニコラエヴィチは彼女の性質をその美しさの故に見定めることが出来ない。対象化や言語化を奪う美しさが確かに彼の前に顕現していると言って良いのではないか。しかし彼女の存在の意味合いは、第一編と第二編の間は謎のままだ。

問題は、レフ・ニコラエヴィチが、ナスターシャ・フィリポヴナに対する憐れみの愛とアグラヤ・イワーノヴナに対する愛とを対峙させた時、憐れみの愛を取る場面だろう。そこでもう一度改めて考えてみる必要があるように思う。

ドストエフスキー「白痴」上巻 第二編

☆p418「Ⅲ 公爵」^{シチヤー}「彼は心から意識的に有益な仕事をしたいと望み、つねに働き、またいつでもどこにいても自分のなすべきことを見いだすことのできる、珍しく幸福な性質をもった、いわゆる最近の活動家の一人であった。」

「Ⅲ 公爵」^{シチヤー}は、私たちの共有世界の価値を表現する登場人物である。目的意識を明らかに持ち、己の行動により社会的価値を明白化する。つまり、某かの対象を己の行動の目的とすることにより、その対象を私たちの世界の価値として意味付けると同時に、価値を維持する役割を担う、〔社会的人間〕とでも呼ぶべき人間の一人である。彼はこの物語の中では傍観者の位置から動かないだろう。

と言うのも、レフ・ニコラエヴィチと関わることのできる人間は、この共有世界に於ける位置づけとしてはどこか不完全で、一風変わった人間だけだからだ。私たちの共有世界が持っている共通の価値の序列の中で、レフ・ニコラエヴィチは決して定まった地位を得ることが出来ない人物であるからだ。そのような評価の不安定な人間と関わる事が出来るのは、私たちの共有世界の価値の序列を、常時明瞭にする役割を担う人間ではない。寧ろその序列からこぼれ落ちそうな危うさを持つ人間だけなのである。

☆p451「あたしは自由だ、あたしはまったく自由な身だって、くりかえし主張なさっているんですよ」〔レーベジェフ→ナスターシャ・フィリポヴナ〕

☆p452「いつも何かさがしているみたいなんです、何かなくしものをしたというふうでしてね。」〔レーベジェフ→ナスターシャ・フィリポヴナ〕

ナスターシャ・フィリポヴナがここで主張する「自由」とは、私たちの共有世界に於いて必然的に生じるはずの、他者との関係性に対する拒絶を意味しているだろう。ナスターシャ・フィリポヴ

ナの狂気は、まず第一にこの点にあるのではないだろうか。

この狂気は、彼女が明白にレフ・ニコラエヴィチと同種の人間であること、つまり共有世界内に本来住むことの出来ない抽象性〔共有世界を踏み外しているという意味での抽象性〕を持つ存在であることを暗示している。そしてその抽象性が、彼女の精神に於ける理性の欠如を物語るのである。この理屈はレフ・ニコラエヴィチの人物像についても同様に当てはまるだろう。

また、彼女の狂気の特徴は、この共有世界内での行動の目的を見失っている点にもあるだろう。目的の喪失は、彼女の生が他者を失っていること、つまり「私」を失っていること（「私」を明瞭化できないこと）を意味しているだろう。このことは彼女の言語の不安定と連動する特徴である。

☆p470「私は前にも一度言ったことだが、あの女を、くく恋で愛しているのじゃなくて、あわれみで愛している」んだからね。」（レフ・ニコラエヴィチ→ナスターシャ・フィリポヴナ）

☆p483「不思議だねえ、あんたたち二人は何から何まで同じだってことは……」〔ロゴージン→ニコラエヴィチ+ナスターシャ・フィリポヴナ〕

レフ・ニコラエヴィチがナスターシャ・フィリポヴナに「あわれみで愛している」と言うのは、二人が全く同種の人間であるということの意味しているだろう。この同情は、同じ精神を持つ者同士の、精神的な通底を前提とすると思われる。ロゴージンだけがそのことを知り得る立場にいたのである。

☆p488「おれがいまあの女にほれてると同じくらい、あの女はいまほかの男にほれてるのさ。このほかの男って誰だか知ってるかね？ それはあんたなんだぜ！」「あの名の日の祝いのときから、あの女はあんたにほれこんじまったのさ。ただ、あんたのところに嫁に行くわけにはいかないと思ってるのさ。だってそんなことになれば、あんたの顔に泥を塗って、あんたの一生をめちゃくちゃにしちまうわけだからな。」〔ロゴージン→ニコラエヴィチ〕

しかし、同時にナスターシャ・フィリポヴナは、レフ・ニコラエヴィチの没落の予兆でもある。その意味は、彼もまた真に「わたくしの世界」の住人であるということだ。彼のような人間は、私たちの共有世界にあっては長く生き延びることが出来ない。通常であれば、すぐさま精神的に抹殺されてしまうに違いない。彼がこの物語の中で生き続けられるのは、偶然ナスターシャ・フィリポヴナと関わり、エパンチン一家と、特にリザヴェータ夫人と関わり得たからだろう。

それでも尚、レフ・ニコラエヴィチは没落せざるを得ない。そのことをナスターシャ・フィリポヴナは早くから見抜いているのである。己自身の失墜が、今まさに辿って行こうとする生の軌跡を通して、レフ・ニコラエヴィチに向かって予言しているのである。だから、自分はレフ・ニコラエヴィチと一緒にすることは出来ない、と考える。そこには、直感的な、共有不能の抽象的な思考が関与していると言って良い。この思考の抽象性は、彼女の狂気の思考に属している。だから、一方で自分とレフ・ニコラエヴィチとが結婚をすることによって、何か現実的で生産性のある結果がもたらせるかも知れないという、前向きな思考は存在し得ないのだし、他方ではこの狂気の思考は固定的ではない。彼女は、同類であるレフ・ニコラエヴィチに、今後も強く惹かれ続け、その態度は揺れ続けるのである。

☆p484「あんたはどんなことにも情熱が激しいから、気ちがいじみたところにまでいかなくちゃ承知しないことだからねえ」〔ナスターシャ・フィリポヴナ→ロゴージン〕

☆p487「あの女がおれのところへ来ようってのは、おれのうしろに刃が隠されてるからこそなんだぞ！」〔ロゴージン→ナスターシャ・フィリポヴナ〕

ナスターシャ・フィリポヴナの没落は、今ではほとんど彼女の意志でさえある。ここには二重の

意味が認められるように思われる。

一つは彼女自身がレフ・ニコラエヴィチに強く惹かれるあまり、彼を没落から守るためには己の生を犠牲にしなければならないと確信するからだ。彼女がロゴージンを選択するのは明らかにロゴージンによって殺されるためである。が、もう一つ、彼女の根源的な狂気の思考、関係性の拒絶という衝動が、この思惟を背後から支えているのだと思われる。だから、彼女が一瞬でもレフ・ニコラエヴィチとの結婚の可能性を信じたとしても、彼女の衝動は再び彼女をレフ・ニコラエヴィチから突き放すに違いない。

ロゴージンの情熱もまた、一つの狂気に近づいている。彼はナスターシャ・フィリポヴナのために、私たちの共有世界にあるすべての価値を踏みしめるからである。

実際のところ、ナスターシャ・フィリポヴナの美は、私たちの共有世界の価値の序列を踏みしめるものである。彼女の美は、至上のものであるからだ。つまり世俗の価値と交換することが出来ない反・価値の領域を、彼女の美しさは開示しているということだ。このことはまた、彼女の美の抽象性を物語る。それは、この世に存在しないという意味ではなく、この世からこぼれ落ちて存在する、という意味の抽象性である。

ドストエフスキーにとって美とは、関係性の拒絶であり、言語の拒絶であり、価値の序列の拒絶なのである。そして恐らくこの直感によって、彼は美というものを正確に意味付けたのだと思われる。

p428「群衆のなかから突然、誰かの怪しい燃えるような二つの眼が、ちらりと注がれたように公爵には思われた。」〔ロゴージンの視線〕

ロゴージンは、この反・価値の領域に深く囚われてしまう。そのために、彼は共有世界のあらゆるルールからもこぼれ落ちて行く。彼がレフ・ニコラエヴィチをナイフを振り上げて襲うのは、ナスターシャ・フィリポヴナとレフ・ニコラエヴィチとの通底に気づき、これを絶つためだが、しかしこの狂気は、彼を一方ではレフ・ニコラエヴィチに近づけてゆくのである。

☆「自分が生きているという感覚や自意識が稲妻のように一瞬間だけ、ほとんど十倍にも増大するのだ。……調和にみちた歓喜と希望のあふれる神聖な境地へ、解放されてしまうのだ。」

☆p511「〈くもしこれが異常な精神の緊張であろうとも、それがいったいどうしたというのだ？もし結果そのものが、調和であり、美であることが判明し、しかもいままで耳にすることも想像することもなかったような充実、リズム、融和、および最高の生の総合の高められた祈りの気持ちにも似た法悦を与えてくれるならば、そんなことは問題外である！〉」

☆p512「自意識であると同時に、最高の段階における直接的な自覚である」

☆p512「なんといっても、彼はそうした一瞬に、いま自分の感じるかぎりない幸福のためには、この一瞬を全生涯に代えてもいいとみずから言えたのではなかろうか。」

レフ・ニコラエヴィチの癲癇発作の予兆であるこの経験の内実は、彼の生の核心部分に触れているように思われる。

生の感覚の増幅と調和感は、他者から切り離された幸福な「わたくし」の目覚めを物語っている。レフ・ニコラエヴィチのケースでは、癲癇発作の予兆という特殊化された経験として描かれているのだが、彼が受容するこの幸福感こそ、人間が普遍的にその一生を通して求め続けているもの、人の生がその周囲を巡り続ける「生の核」のようなものだ。

レフ・ニコラエヴィチはこの経験を己の身を通して知っている。しかしそのことによって、彼の生は、他者に比べて大きく抽象性の領域に踏み込んでいるのである。というのも、彼は、この経験の内には他者が存在しないということを知っているし、この経験を共有できる者は、誰一人として

存在しないということも知っているからである。つまり、彼のこの経験は、共有世界の外に位置しているということであり、そのことによって事実上、反・経験と呼ぶことしか出来ないものであり、そのことをレフ・ニコラエヴィチは充分に理解しているのである。

調和と感覚の絶対性、幸福感の横溢と唯一性、これらが美というものの本質に属しているということ、同時にレフ・ニコラエヴィチの生の中心点が、その点にこそ中心を持つということ、このことがこの作品の物語としての質を決定付けているのは間違いのないところだし、これこそがドストエフスキーが言う、「最も美しい人間」の定義なのである。

このレフ・ニコラエヴィチの生の抽象性は、彼の宗教的理解をも可能にしているのだろう。

☆p501「宗教的感情の本質というものは、どんな論証にもどんな過失や犯罪にも、どんな無神論にも当てはまるものじゃないんだ。そんなものには、何か見当ちがいなところがあるのさ。いや、永久に見当ちがいだろうよ。そこには無神論などが上^{うわ}つ^{つら}面をすべって永久に本質をつかむことのできない、永久に人びとが見当ちがいな解釈をするような、何ものかがあるんだ。しかし、肝心なことは、この何ものかがロシア人の心に、誰よりもはっきりとすぐ眼につくということなんだ。これが私の結論だよ！ これこそわがロシアの中からつかむことのできる、最初の信念の一つなんだよ。」

私たちの共有世界に神は存在しない。これは既に周知の事実ではないだろうか。私たちの共有世界の中に、神が顕現することは絶対にない。（「絶対」という言い方を躊躇う必要はないと私は考える。）だからこそ反対に、そこで行われる世界を共有するための言語による論理的検証は、どんな作用をも、この神の領域、つまり「宗教的感情の本質」と言われる領域には、及ぼし得ないのである。

このことは、美や幸福についても言い得るはずだ。私たちの共有世界に於いて、最も願わしいものは、最も有り難いものであり、それらは、私たちの手が容易に届くようなところにはないということなのだ。

だから、ある意味ではストイシズムは人間的な生き方として普遍性がある、ということになるのではないか。

逆に言えば、レフ・ニコラエヴィチの元に押しかける「実際の連中」の生き様は、人間の墮落した時代を証明しているとも言えるのではないか。

p434「この男がジェマリン家殺人事件のほんとうの犯人なんです、」

p442「…いや、デュバリ伯爵夫人の魂の安息まで祈ってるのを、ぼくはこの耳で聞いたことがありましたよ。コーリヤだって聞いています。まったく気ちがい沙汰ですよ！」[レーベジェフの甥]

☆p454「いまの世の中はあらゆるものが衝ではかれ、取引きで決められ、人間はただ自分の権利ばかりを捜しもとめている始末ですからねえ。」[レーベジェフ]

☆p580「あの連中はニヒリストよりもっと過激だということです。…いちばん実際の連中ですからね。これはつまりニヒリズムのある種の結果でしょうが、…もう何がなんでも実際にやってみるんです。」

レフ・ニコラエヴィチの元に押しかける若者たちの中心にいるのはレーベジェフの甥であろう。彼こそ、「私たち」の墮落を象徴する存在だ。

この墮落は、ニヒリズムを経過することにより、美や幸福や神の領域を見失っているということ、さらには「私たち」の共有世界の中で、「私」だけが一方的に肥大して、相補的に存在するはずの「あなた」が矮小化されており、結果的に「私」の「権利」だけが強調されるという特徴によっ

て起きているようだ。

☆p584「自分の権利にたいする完全な、と同時にいかにも間の抜けた陶酔の色と、その一方、つねに、自分は辱め^{はずか}られている、と考えたがる、一種不思議な欲望にかられているみたいであった。」[アンチーブ・ブルドフスキー]

☆p664「要するに権利謳歌^{おうか}の理論に帰着するようですね。あらゆるものに先行し、あらゆるものを放棄し、あらゆるものを除外さえして、ことによったら、権利そのものが何に起因するかも研究しないで……」[エヴゲーニイ・パーヴロヴィチ→イポリート]

☆p665「そうした理論からすぐ力の権利が、つまり拳骨^{げんこつ}を唯一絶対とする権利と個人的欲求の権利へ、一足飛びに飛んでしまうということなんです。」[エヴゲーニイ・パーヴロヴィチ]

彼らが住んでいる共有世界では、「私」の権利の肥大と「あなた」の矮小化が起きている。これは、恐らく彼らの生を取り巻く環境の恵まれない性質に起因するところがあるのかも知れない。その反動として、自分の存在を他者の圧迫から何としても守り、他者に自分の存在をそれと認めさせようとする動きが生まれているのかも知れない。

しかしもう一つ考えられる原因はより重要であるように思えるが、彼らにとって他者の存在を評価することが至って難しいという事実が、彼らの「私」としての在り方を矮小化しているという点がある。

これについては、仮にこんなふうには考えられないだろうか。

「わたくしの世界」の至上性を見失ってしまった「私」から見ると、自分の住む共有世界から聖性が失われることになるのではないか。そして世界から聖性が失われるということと、「私」が誰彼の「あなた」の上に、至上性を映し見る手段が失われるということとは、同じ一つの出来事の表と裏を表しているのではないかと。

p494～495 「人によってはあの絵のために信仰を失うかもしれない」[ハンス・ホルバインの模写]

作中に何度か登場するこの絵は、当時の宗教的感情の失墜を象徴するものだろう。

アンチーブ・ブルドフスキーは、レフ・ニコラエヴィチに出会い、彼を「他の誰よりも、きっと優れた人物である」と確信する。それにより、彼は辱めを受け続けなければならないという不幸の底に生きていた「私」を救い取ることができた。[p726 ブルドフスキーの手紙]

レフ・ニコラエヴィチという「あなた」の上に、優れた資質を認めることが出来たブルドフスキーは、同時にその内面に於いて、「わたくし」の至上性を自覚できるようになったのではないだろうか。

人は、幸福であろうとするならば、この能力が必要となるのではないかと。己の内面にあっては、「わたくし」の至上性を感じることができる力が必要なのではないか。しかし、この力は、それと自覚することが難しいように思われる。

この感受性は、他者に対しても同様の力を発揮すると考えられないか。他者の上にこの感受性を振り向けたとき、人は己の秘められた至上性を、他者の上に映し見るのではないだろうか。その時、他者が自分よりも遙かに優れた資質を持つ者として感じられるのではないかと。

異性との愛情交換に於いて、私たちが発見する相手の至上性は、そのようにして己の内面的な、無条件の「至上性」とも呼べるものを、恋人の上に重ねて見ているのではないだろうか。

青春時代にあつては、私たちは一人一人が己の至上性を生きようとする。そして友人たちもまた唯一無二の至上の神々のようにして生きようとしている。そのような特殊な共有世界が、青春時代の私たちが通過する世界ではないだろうか。

リザヴェータ夫人

p10「夫人はたえば自分自身を『ばかで不作法な変人』と悪し^あざまにののしり、邪推のために苦しみ、ひっきりなしに途方にくれ、何かちよつとした厄介なことさえ解決することができず、たえず不幸を大げさにこぼすのであった。」(リザヴェータ夫人)

p11「世間がリザヴェータ夫人を〈変人〉扱いにしているのも、疑いもない事実であるが、それと同時にまたたしかに尊敬もしていたのである。ところが夫人は、ついには自分が人から尊敬されているということさえ信じなくなってしまうたのである。いや、この点にこそいっさいの不幸があったのである。」

第三編は、当時の世の中と新しい思想状況を生きる人々と、「ほんとうの人間」との関わりを描いているように見える。

リザヴェータ夫人がニコラエヴィチに、心のあり方において近いことは、彼女が世間から「変人」扱いされていることにつながっている。世間は同時に彼女に対して尊敬を払っているのだが、そのことを彼女自身は認めることができない。この盲目は、彼女の眼が、世間的な視線に塗れていないということを端的に示しているように思われる。リザヴェータ夫人の、世間からの踏み外しが、ニコラエヴィチを世間に繋ぎ止めておくのだし、また、夫人の意に反してアグラヤー・イワーノヴナとニコラエヴィチとの恋愛関係を演出しとするのである。

リザヴェータ夫人の存在は、もしかするとニコラエヴィチの未来を切り開く、唯一のアリアドネの糸であったかもしれない。アグラヤー・イワーノヴナは、しかしいかにもか細い糸であった。

ニコラエヴィチの恋

p48「私はただアグラヤー・イワーノヴナに言明したかったのです……つまり、私がアグラヤー・イワーノヴナに結婚を申しこむつもりなんか……まったくなかったということを、いや、たとえそれがいつの日のことであっても……この点についてはすこしも私に罪はないのです、誓って私には罪はありません、アグラヤー・イワーノヴナ！ 私は一度だってそんなことを望んだことはありませんし、一度だってそんな考えを抱いたことはありません。これから先も望みはしません。」[ニコラエヴィチ→アグラヤー・イワーノヴナ]

ニコラエヴィチの恋心は明らかである。アグラヤー・イワーノヴナについても同じなのだが、二人はまるで子供同士のように、自分の身に起こったことに気づかないし、素直になれない。少なくとも、ニコラエヴィチは、己の身に起きたことに対して、人間らしく、あるいは世間の一人前の男らしく、振る舞う方法を持っていないのである。驚くべきことに恋は、彼の中で完結しているのだ。このことは、彼が世間的な人間像からはみ出していることを明瞭に物語る。この点で彼は、関係性から退いた、抽象性の領域にずれ込んだ存在だ。「ほんとうの」という形容詞が可能なのは、この閉ざされた、見えない領域においてなのである。

一方のアグラヤー・イワーノヴナは、深窓の令嬢として育てられたことによって、今はニコラエヴィチの隣人である。しかし、彼女の成長しようとする心は、世の中へとその根を伸ばしつつある。彼女は世の中の役に立つことがしたいのだ。教育事業をしてみたい。世間的に評価されることがしたいのだ。Ⅲ公爵のように、一人前の人間になりたいのである。だから、今はニコラエヴィチの姿が正確に眼に映ってはいるが、彼女が成人したときには、つまり共有世界で評価を得られる某かの働きができるようになったときには、何ものでもないニコラエヴィチという存在がその

目にまだ映っているかどうかは、保証の限りではないのである。

ロシアの自由主義

p24「わが国の自由主義者は、現在までのところただ二つの階層からだけ出てきたのです。すなわち、以前の（いまはなくなってしまった）地主と神学生からなる二つの階層ですね。ところが、それはいまや双方とも一種特別な、国民からまったく遊離した完全な階層^{カスト}に変化してしまい、それは時がたつにしたがって、世代より世代を追って、はなはだしくなってきました。」「[エヴゲーニイ・パーヴロヴィチ]

p27「ロシア的な社会主義者なんかおりませんよ。かつていたためしが無いのです。なぜかという、わが国の社会主義者はみんな、地主か神学生の出だからです。わが国の有名な折紙つきの社会主義者はみんな、こちらにいるのも外国にいるのもみんな農奴制時代の地主出身の自由主義者にほかならないからです。」「[エヴゲーニイ・パーヴロヴィチ]

p29「ロシアの自由主義は、現存する社会秩序に対する攻撃ではなく、わが国の社会秩序の本質にたいする攻撃であるということです。いや、単なる秩序、ロシアの社会秩序にたいする攻撃ではなくて、ロシアそのものにたいする攻撃なのです。」「[エヴゲーニイ・パーヴロヴィチ]

p29「あの連中は民衆の風俗を、ロシアの歴史を、その他あらゆるものを憎悪^{ぞうお}しているのです。」「[エヴゲーニイ・パーヴロヴィチ]

エヴゲーニイ・パーヴロヴィチの「自由主義」論、「社会主義」論は、これらの論者達を「地主と神学生」に帰し、ロシアの「社会秩序の本質にたいする攻撃」「ロシアそのものにたいする攻撃」であると看破する。この観点は、おそらく第四篇のニコラエヴィチの大演説にも踏襲されてゆくように思われる。

エヴゲーニイ・パーヴロヴィチがここで取り出そうとしているものは、ある弁護士の弁護の手法である「自然なこと」という言い回しだ。ロシアの過去の秩序が覆された瞬間、ロシアの倫理的常識が転覆された瞬間に、その破壊を「自然なこと」である、と追認する手法である。

この手法は、あらゆる階層の人々に浸透しつつあり、第二篇のレーベジェフの弁護士の模倣の場面にもあるし、またブルドフスキー等の権理論にも同じ論理意識が働いていると言ってよい。さらにこれらの論理意識はどんな共闘にも結びついていず、ブルドフスキーの周辺に集まった若者達も烏合の衆でしか無く、レーベジェフと甥は互いに反目しあうのである。つまり、当時のロシアは、これまで維持されていた秩序が崩れてしまったまま、混沌とした状況のまま放置されていたのではないだろうか。

そこにニコラエヴィチが登場したのだ。

p44「でも、私はこの社会において余計ものなんです…私には礼にかなったジェスチャーがないのです。感情の節度というものが無いのです。私の言葉はすべて見当違いで、その思想にふさわしくないのです。それはこうした思想にたいする侮辱です。そんなわけですから、私には権利がないのです…」[ニコラエヴィチ]

若者達の権理論に対比するように、ニコラエヴィチは己に「権利がない」と言う。これは真実だ。これこそ彼が世間からこぼれ落ち、人間としての基本的な能力を持たないということの暗示であり、その点についての狂おしい自己確信を表している。

彼の立ち位置については、Ⅲ 公爵とアグラヤー・イワーノヴナが具体的に言い当てている。

Ⅲ公爵のニコラエヴィチ評とアグラヤー・イワーノヴナの弁護

p42「地上の楽園なんてそう簡単に得られるものじゃありませんよ。ところが、あなたはとにかく、多少なりとも楽園というものをあてにしていられようですね。楽園というものはなかなか厄介なものです。あなたのこのうえなく美しい心でお考えになるよりも、はるかに厄介なものなのですよ。」〔Ⅲ公爵→ニコラエヴィチ〕

Ⅲ公爵は、ニコラエヴィチを「美しい心」の持ち主と看破している。そして同時に、ニコラエヴィチがくるまっている光雲が、現実から距たっていることにも気づいているようだ。彼の正確な眼力が、ニコラエヴィチをしっかりと捉えているのである。この正確な眼力は、同時に彼をニコラエヴィチから遠ざけもするのである。

p46「ここにいる人はみんなみんな、あなたの小指ほどの値打ちもないのです、あなたの^{えいち}観知にも、あなたの感情にも！ あなたは誰よりも潔白で、誰よりも高潔で、誰よりもりっぱで、誰よりも善良で、誰よりも賢いかたなんです！」（アグラヤー・レフ・ニコラエヴィチ）

同じようなことがアグラヤー・イワーノヴナについても言えるだろう。彼女は子どもの心と眼とで、ニコラエヴィチを正確に捕捉する。Ⅲ公爵のように、その不可能性を見るのではなくて、断片的ではあるがニコラエヴィチの至上性を取り出すのである。この敬意は純粹であり、アグラヤー・イワーノヴナのニコラエヴィチへの恋を底辺から支えることになる。

しかし、ニコラエヴィチは、アグラヤー・イワーノヴナの純粹な美を愛するが、それは世の中の男達のように愛するのではなかった。「厄介」な地平に、ニコラエヴィチは降り立つことができないのである。そのニコラエヴィチの本質的な核心部分をⅢ公爵は見抜いていたのである。

〔人肉を食べた人〕

p130「すなわち、どんな災厄よりも、どんな凶作よりも、どんな拷問^{ごうもん}よりも、ペストよりも、天刑病よりも、あらゆる地獄の苦しみよりも、ずっと強い思想があったわけです！ もしこの人の心を拘束し、矯正^{きようせい}し、生命の根源を豊かにする思想がなかったら、人類はとてこれらの地獄の苦しみに耐えることができなかったでしょう！」（レーベジェフの弁舌）

p131「財産は多くなってもその力は小さくなったのです、人を拘束する思想なんかありません。何もかもへなへなになってしまったんです、何もかももろくなってしまったんです。」（レーベジェフの弁舌）

レーベジェフは、人肉を食べた人が罪を告白し、罰せられることを最後に選ぶのにはそれ相應の思想が必要であった、と結論している。この思想は、現代の自由主義思想ではない。現代社会に「全人類を拘束するような思想」はない。「生命の源」を守るための思想はない。レーベジェフに言わせれば、その思想とは「良心」なのだろう。この宗教的な良心は、しかしそう呼んだからと言って、何か分かり易くなったわけではないし、それどころか何らかの思想が明らかにされたわけでもない。けれども、ある状況は説明しているのかもしれない。

つまり、どんな無節操な男の心にも、モラルが蘇る可能性がある、という思想状況である。この状況を、作品の登場人物は「ロシア」と呼んでいるのではないだろうか。信仰の衰退や自由主義思想の蔓延といった時代背景は、ルールに対する侵犯が、繰り返し成される時代状況を物語る〔全く現代日本の社会状況そのものではないか！〕のだが、それは状況の半面について触れるばかりではないだろうか。むしろ、「ロシア」と呼ばれるイメージが、語ろうとして語り得ていない実体こそが、重要なものかもしれない。それが、モラルの可能性に向けて、時代が開かれているのか否か、という視点である。

モラルは、その人間の中に形あるものとして、思想として、形成されているわけではないので

はないか。そうではなくて、これこれの瞬間に、ある場合は彼の内面を襲い、他の場合には忘れ去られ顧みられることがない、浮遊する思惟の形、それが本来のモラルというものではないのだろうか。

時代がよい状況であれば、モラルは浮遊している。つまりそれは、何時如何なるときでも、誰その内面をモラルが襲う可能性がある、という意味である。「白痴」が語られている現在では、世間の人々の意識を、論理性が際立って席捲してしまっていて、モラルが爆発的に人々の内面に浸潤する可能性が絶たれているのではないだろうか。「罪と罰」のラスコーリニコフが立っていた精神的状況が、まさにそれであつたろうと思われる。

p136「公爵は世界を救うものは美だと主張されておられます！」[イポリート]

これに対して、ニコラエヴィチは、「美」こそが「世界を救う」と言う。この言葉はイポリートの言葉によってしか語られず、ニコラエヴィチはその発言に対して、肯定も否定もしないのだが、ニコラエヴィチが、反＝現実の領域に善なるものを見出しているということは、多いに有り得ることだと思われる。関係性から隔てられた抽象的領域にこそ、至上性が宿るのであり、抽象的な善なるものもまた、そこに宿ると推察されて当然であろうと思われる。

〔イポリートの遺書〕

p165「コロンブスが幸福を感じたのは、彼がアメリカを発見したときではなくて、それを発見しつつあったときなのだ。彼の幸福の絶頂は、おそらく新世界の発見に先だつちようど三日前のことであつたろう。」

p166「問題はその生き方にあるのだ、ただその生き方にのみかかっているのだ——絶え間なき永遠の探究の過程にあるので、決して発見そのものにあるのではない！」[イポリートの幸福感]

イポリートは、自由主義者であり無神論者でありながら、己の卑小さに^{クレジット}気付く、これに戦いを挑もうとする。彼の卑小さは、現実的な利益や関係性の中における信用、あるいは権利といった目に見え、他者から承認を受けた価値に塗れている自分の上に見出されたのだ。彼が「コロンブス」の幸福を論じたとき、正確にこの結果物によって構築された価値の塊から一歩退いているのではないだろうか。「新世界の発見に先だつちようど三日前」とは、共有世界による承認から離れた場所、おそらく最も離れた場所(乗組員が反乱をおこして、絶望のあまり船をヨーロッパに向けようとしたとき)だ。人が何ものでもないものを求めているとき、そのなにものでもないものこそが、人の生を至上性に近づけるのである。

p196「こんな死体を眼の前にしながら、どうしてこの受難者が復活するなどと、信じることができるだろうか？ という疑問である。もし死というものがこんなに恐ろしく、また自然の法則がこんなに強いものならば、どうしてそれに打ちかつことができるだろう、という考えがひとりでに浮んでくるはずである。…この絵を見てみると、自然というものが何かじつに巨大な、情け容赦もないもの言わぬ獣のように、いや、それよりもっと正確な、ちょっと妙な言い方だが、はるかに正確な言い方をすれば、最新式の巨大な機械が眼の前にちらついてくるのである。その機械は限りなく偉大で尊い存在を無意味にひつつかみ、こなごなに打ちくだき、なんの感情もなくその口中にのみこんでしまったのである。しかも、その存在こそはそれ一つだけでも、自然全体にも、そのあらゆる法則にも、地球全体にも値するものではなからうか。いや、その地球さえも、ひょっとすると、ただこの存在がこの世にあらわれるためにのみ^つ創りだされたのかもしれないのだ。」

☆ ハンス・ホルバインの「墓の中の死せるキリスト」

http://www.salvastyle.com/menu_renaissance/holbein_grabe.html

http://www.salvastyle.com/images/collect/holbein_grabe00.jpg

自由主義や社会主義による「ロシア」の破壊は、信仰の破壊でもあるのだろう。ハンス・ホルバインの模写は、その破壊された信仰の象徴的イメージとして登場してきた。イポリートは、この絵と対峙する。彼が自殺を試みるのは、死に対する恐怖に打ち勝つためであった。そして背景には、信仰があるのだ。自らの論理性ではどうすることもできない信仰があるのだ。その信仰を、自らに対して証明する意図もあったろう。

しかし、この試みは失敗に終わった。このエピソードが意味しているのは、彼が単に死に損なった、ということだけではないだろう。そもそも彼のこの自殺の試みそのものが滑稽な茶番であり、本人の勘違いでしかない。自らの手で死のうが結核で死のうが、イポリートの死に、どんな違いも起きようがない。彼自身が言っているが如く、問題は死に方にあるのではない。「問題はその生き方にあるのだ、ただその生き方にのみかかっているのだ」から。

この絵がロゴージンの家に飾られているところに注意したい。

p205「きみたちの自然も、きみたちのパーヴロフスクの公演も、きみたちの日の出も、日の入りも、きみたちの青空も、きみたちの満ち足りた顔も、ぼくにとってなんだというのか？　すべてこうしたいつ果てるとも知れぬ喜びの宴が、ぼくひとりを余計者と見なしていままさにその幕をあけようとしているのではないか。いまぼくのまわりで日光を浴びながら、うなっているこのちっぽけな一匹の蠅すらも、この宴とコーラスの一員であり、自分のいるべき場所を心得、それを愛して幸福でいるのに、ただぼくひとりだけは除け者にされているのだ、ただいままでは臆病なばかりにそれをさとうとしなかったのだということを、いまは一分ごとに、いや、一秒ごとに痛切にさとらなければならないのだ、いやでもさとら(さ)せられるのだ。」

しかし、彼は死に顔を向けることによって、人間の本質的な孤独に向き合うことになる。世間的な価値に塗れている間は烏合の衆の間に紛れて見えずにいた「除け者」の場所に気が付く。関係性の中には、見えない、隠された生の孤独である。この同じ孤独を、ニコラエヴィチも知っていた。イポリートも今や「ただ自分ひとりだけはなんにも知らず、なんにも理解できないのだ、人間も、音響も、わからないのだ。自分はすべてのものに縁のない赤の他人であり、除け者なのだ」というニコラエヴィチの隣人の一人となった。

恋の不可能性

p255「すこしも愛してなんかおりません。ああ、あの女といっしょに暮していた時分のことを想いおこすと、どんなにぞっとするか、それがあなたにわかっていただけたら！」〔ニコラエヴィチ→アグラヤ・イワーノヴナ〕

p256「あの不仕合わせな女は、自分のことを世界じゅうの誰よりも墮落した、いちばん罪ぶかい人間だと、ふかく信じきっているのです。ああ、どうかあの女を辱しめないでください。石を投げないでください。あの女はいわれなく辱められたという自覚のために、あまりにも自分を苦しめているのです。」〔公爵→ナスターシャ・フィリポヴナ〕

p258「ああ、私はあの女を愛していました。とても愛していました。……でも、あとになって……あとになって……あとになってあの女はすっかりさどってしまったのです」「わたしはただあの女をあわれんでいるだけで、もう……あの女を愛してはいないってことをです」

p262「しかし、私は自分といっしょになったら、あの女の破滅だってことを、たしかに知っているんです。」〔ニコラエヴィチ&ナスターシャ・フィリポヴナ〕

ナスターシャ・フィリポブナとニコラエヴィチの関係には抜き差しならぬ面がある。

二人はお互いに一瞬のうちに共鳴し合ったようだ。ナスターシャ・フィリポブナの方は、その愛の故に狂気のような混乱をいっそう掻き立てる。というのも、彼女は自分を世界で最悪の墮落した女だと信じているからである。この位置づけは、彼女の世界が至上性を奪われたことにより生まれたのだと思われる。

人間は、孤立した利己的な世界から関係性の世界へと少しずつ移行同化してゆき、徐々にその生のあり方を改めて行くものなのだろうか。ナスターシャ・フィリポブナの場合は、それを知らぬうちに奪われてしまい、その結果、共有世界に対する憎悪と己への侮蔑を、生の支えにするに至ったようだ。

ニコラエヴィチは、ナスターシャ・フィリポブナの本質を、同類の人間として見抜いた。彼らの愛は当初本物であったろう。互いに抽象的な存在者として惹かれ合ったのだと言って良いだろうか。

しかし、ナスターシャ・フィリポブナの目から見て、ニコラエヴィチはまだ純粋な、傷を負っていない青年なのである。彼は墮落していない。何よりも至上性をまだその世界の内に決定的に残している。この事実の故に、彼女はアグラヤ・イワーノヴナとニコラエヴィチを結婚させることにより、ニコラエヴィチの没落を救わねばならない、という強迫観念に囚われることになる。この思い込みがあるために、ニコラエヴィチは、ナスターシャ・フィリポブナに近づくことが出来なくなり、彼女への愛を捨て去ったのではないだろうか。彼の思いは憐憫に変わる。変えざるを得なかったと言うべきか。この変節がいよいよナスターシャ・フィリポブナを苦悩させたのではないだろうか。

しかし、ナスターシャ・フィリポブナの思い込みは、ある意味では正しかったようだ。ニコラエヴィチが「ぞっとする」と回想するのは、ナスターシャ・フィリポブナの侮蔑の醜悪さが、彼の世界を汚したからではないだろうか。二人は、共に生きるための条件を、初めから与えられていなかったのである。ニコラエヴィチは、その純粋で無邪気な盲目の故にそのことには気づかず、ナスターシャ・フィリポブナだけが、二人の不可能な運命を背負う決意をしていたのである。

ドストエフスキー「白痴」下巻 第四編

ルキヤン・チモフェーヴィチ[レーベジェフ]の四百ルーブル紛失事件及びその返還

イヴォルギン将軍の、ナポレオンとの思い出話

p418「つまり、将軍は情欲といってもいいほど、いや、われを忘れてしまうほど、嘘をついているくせに、それでも歓喜の絶頂にいるときですら、なお心の中では、自分の言葉を人は信じていないのだ、いや、とても信じられるはずがないのだ、と疑いをいだいているような嘘つきのひとりではなからうか。」

イヴォルギン将軍の虚言癖について見ると、この虚言が彼にとって、彼の世界の至上性の露出であるということが感じられる。彼は、虚言を呈している間、「歓喜の絶頂」を経験している。しかし、同時に彼は「人は信じていない」と感じ、「ふとわれに返って、無性に恥ずかしくなり、公爵は自分に限りない同情をいだいているのではないかと疑って、侮辱を感じたのかもしれない」(彼[＝公爵]の予感の的中した)とあるように、ある微妙な二重性を生きているようだ。

一方で、将軍は他者が決して受け入れることのない虚構の世界を生きている。共有世界の側からすれば、それらの言葉は全くの虚言なのだが、彼自身はその幻想世界の中を確かな充実感と喜びと共に生きているのである。他方、彼はほとんど同時に、許されざる「私」をも生きている、

人々が自分と世界を共有していないことを知っており、人々の間で自分の世界が全く根も葉もない無価値な虚言でしかないという評価を受けていることを知っているのである。

この二重性は、レフ・ニコラエヴィチが生きている二重性とほとんど瓜二つなのである。二人の生きる世界は、共に共有世界に実質的な裏付けのない世界であるのだが、違いはと言えば、ニコラエヴィチの世界は抽象性の側に傾いているのに対して、イヴォルギン将軍の場合は具体性の側に傾いているところであろう。この差が、ニコラエヴィチの世界についての解釈の可能性を思うさま広げてしまう。その為に彼が非難されることはほとんどない。一方の将軍の方は、あまりにも具体的な虚言であるが為に、解釈の余地がなく、容易に事実との相違が明らかにされてしまう。

二人とも、己が異邦人であることに苦しみながら、一方は蔑まれ続け、他方は愛情を受け続けるのである。

ルキヤン・チモフェーヴィチ[レーベジェフ]の四百ルーブル紛失事件及びその返還

イヴォルギン将軍のモラル、その他モラルの本質について

もう一つ、イヴォルギン将軍は、結局レーベジェフの四百ルーブルを返却した。この行為が、彼のモラルに原因することは明らかではないだろうか。一旦ルール違反をした将軍は、レーベジェフとの間にあったはずの社会的ルールから離脱している。そこから返却に至る過程で彼の内面に起こるのは、レーベジェフの暗黙の催促に対してどう対応するか、という個人的な判断のレヴェルでの葛藤である。これはレーベジェフが語った人肉を食べた男が、最終的に出頭して責めを受ける決意をするに至る過程と同じではないだろうか。

モラルは、個の生の中で、彼の言動を大きく左右する至上性として立ち現れる。

それは、共同体のルールの内面化として始まったものかもしれないが、結局はルールとは違うものになったのだと私には思われる。共同体のルールは、常にそこに厳然としてある。それは文字を持つ。それは人間の行動によって守られている。けれども個人のモラルには、それらの形式的実体的な道具立てがない。それは個人の内面にしか存在しない。そのために、浮遊するという性質を決定的に帯びるのである。それは、「わたくし」の至上性と結びついてしか存在し得なかったルールであり、その本質は決定的に変質しているように思われる。モラルは関係性の領域から完全に離脱してしまっているのだと言うことができるのではないだろうか。それは関係性への意識ではなく、己の至上性への意識ではないのだろうか。

また、レーベジェフが、自分の甥を指して、この男こそ六人殺しの犯人だ、と断定するのは、甥の中に、殺人者やその弁護士と同じ世界があることを言い当てている。彼らは「悪徳と鉄道の時代」の申し子だ。六人を殺したことについて、p36「自分のことを犯罪者と考えようとしなばかりか、そうする権利があったのだ」と考えたり、あるいはむしろ p33「自然なことである」と考えるのだ。これらの新しい人びと、非ロシア的な自由主義者たちは、ロシア的な共同体を破壊し、そこから離脱した人びとである。さらにはそのことによってだろうか、至上性との関わりが希薄なのである。なぜなら、至上性とは、非現実的であり、信頼に値しない浮遊性という性質を持つからだ。それは、鉄道のように、いつもそこにあるものではない。それは見出せない時がある。それは思い出したように訪れるものでしかないからである。

レフ・ニコラエヴィチの愛

p451「自分はふたたび自由に、アグラーヤのところへ遊びにきて、彼女と言葉を交わし、彼女と
いっしょにすわり、彼女といっしょに散歩できるということだけでも、彼にとっては疑いもなく幸福
の絶頂であった。そして、一生涯それだけで満足していたかもしれないのだ！（ほかならぬことの
満足こそリザヴェータ夫人が心ひそかに恐れていたことである。夫人は彼の人となりを見ぬいて
いたのである。）」（レフ・ニコラエヴィチ）

ニコラエヴィチにとって「結婚」そのものは、ほとんど意味を持たない。彼は「ほんとうの」という
修飾語が表すように、その人物像が抽象的な領域にずれてしまっている人間なので、私たちの
共有世界に生きるということに対する、興味そのものがまずあまりないのである。彼は、「わたく
し」の生の側に重心のある人間の一人とすることができるだろう。その点で、リザヴェータ夫人の
意見はまったく正しい。この事が、ナスターシャ・フィリポヴナへの結婚の約束と、アグラーヤ・イ
ワーノヴナへの拘りとの両立を可能にしているのである。またこの点が、エヴゲーニイ・パーヴロ
ヴィチには理解のできない点だったのだ。

p473『「アグラーヤ！　でも、うれしい気持ちだけは残っていくのです。私はあなたがそんな子
供なのが　——そんなすばらしいかわいい子供なのが、うれしくてたまらないんですよ！　あ
あ、あなたははっとも美しい人間になれますよ、アグラーヤ！」／アグラーヤはむろん腹をたてる
ところだった。』（ニコラエヴィチとアグラーヤ・イワーノヴナ）

ニコラエヴィチのアグラーヤ・イワーノヴナへの愛情は、彼女が子供であることの一点に由来
している。彼女の美は、彼女が世間知らずでいる間だけ、彼女の内面によって維持され続けるだ
ろう。しかし、彼女が大人になってしまえば、最早ナスターシャ・フィリポヴナのような美しさを維持
することはできなかったに違いない。ナスターシャ・フィリポヴナは、おそらくニコラエヴィチが指摘
しているように狂気に苛まれていて、その反＝理性的な分だけ、美の領域に踏み留まっていた
のだと思われる。

ナスターシャ・フィリポヴナの存在は、だから二重の意味で美の蹂躪である。彼女の無垢が、ト
ーツキイによって利用され、かつ汚されたということが一つ目の意味。もう一つは、彼女の存在
が、美が狂気でしかないことの証明となる、という意味である。

レフ・ニコラエヴィチの議論

ローマ・カトリックと無神論

p511「私の考えでは、ローマ・カトリックは信仰ですらなくて、まさに西ローマ帝国の継続にすぎ
ません。そこでは信仰をはじめすべてのものが、この思想に支配されているのです。……そして
最も神聖で、真実で、素朴で、炎のような民衆の感情をもてあそび、何から何までいっさいのもの
が、金と卑しい地上の権力に代えられてしまったのです。これでも反キリストの教義とは言えない
のでしょうか！　こんなもののなかから、どうして無神論が生れずにいられ
ましょう？」

ローマ・カトリックを無神論の淵源と看破している点は、ドストエフスキーとニーチェの近親を物
語る。芹沢光治郎の「教祖様」も、天理教の教祖を描きながら、教団のあり方については、同様
の認識に基づいて書かれていたと思う。およそあらゆる宗教団体は、その淵源である信仰の破
壊となるのは、今日もはや争いようのない真理と言わねばならないだろう。

ただし彼が描いてみせる光景、「その剣に虚偽と陰謀と、欺瞞と狂信と、迷信と、悪業とがつけ

くわえられた」は、ニコラエヴィチにおいては、彼独自の至上性の見地から下界を見下ろした限りの見え方ではないだろうか。ニコラエヴィチにとっては、関係性の中で力を獲得しようとする意識は、全て、徹底的に反・信仰であり、至上性の失墜なのである。もちろんそれは事実だ。事実だが、もし人が共有世界の生を意識することが出来るならば、この権力志向が、関係性の領域に信仰の場を植民しようとする意図にとって、必然であることも理解できるであろう。なぜなら、信仰とは、私たちの共有世界にどんな根拠も見出せない営みであるからだ。神を信仰しています、という人から、どの神であるか、指さされることは永遠に不可能なのである。神は、私たちの共有世界には降臨しないからだ。神は、現に信仰するその人の「わたくしの世界」にのみ存在するからである。だから、もしこの営みを、この私たちの世界に根拠付けようとするならば、「神？ そんなものどこにいる？」という他者の正統で圧倒的な意識に対抗するべく、根拠のない強い権力が必要になるのである。

その真実が見えないという性質こそが、ニコラエヴィチの人間像の抽象性を物語るのである。また、同時に彼の不幸、あるいはナスターシャ・フィリポブナの不幸を決定的にするのである。

レフ・ニコラエヴィチの議論

ローマ・カトリックと社会主義

p516「そこに見落とした祖国を、発見して喜んだからなのです。これこそほんとうの岸だ、陸地を見つけたぞと、身を投げだして接吻^{せつぶん}するのです。ロシアの無神論者とロシアのイエズイット教徒は、ただ、単に虚栄心、見苦しい虚栄的な感情からばかりでなく、精神的な痛み、精神的な渴き^{かわ}から生れているのです。つまり、偉大なる事業、堅固な岸、いまだかつて一度も知ることがなかった^{どうけい}ので、信ずることをやめてしまった祖国への憧憬から生れてきているのです。」

ここで言われている「祖国」「岸」「陸地」とは、共同体の幻想なのであろう。私たちの「鉄道と悪徳」の近代が破壊した古き良き共同体の幻想なのであろう。カトリックのイエズス会が見ようとするもの、社会主義者が見ようとするものは、この失われた「岸」である、というのがニコラエヴィチの観点であり、おそらくドストエフスキーの見方なのであろう。

社会的事業も社会主義思想も、共に新しい共同幻想の建設を意図しているのだが、ニコラエヴィチはそこに単なる幻をしか見ない。それらの営みにおいては、関係性を意識した行為が必然であり、関係性の中の力と力の衝突が必然であるからだ。

それでは、ニコラエヴィチが提唱する道は何だろうか。

p517「ああ、渇きにもえるコロンブスの道づれたちに〈新世界〉の岸を啓示してやってください、ロシアの人間に、ロシアの〈世界〉を啓示してやってください、その眼から隠れて地中に潜む黄金と、キリストによってのみ成しとげられるかもしれぬ全人類の復興と復活を未来において啓示してやってください。そのときこそ力強く誠実で、叡智^{えいち}にみちた謙虚な巨人が、驚愕した世界^{きやうがく}の前に……忽然^{こつぜん}と立ちあらわれるのを眼にするでしょう。」「[ニコラエヴィチ→ロシア]

ニコラエヴィチは「ロシアの世界」と言う。「眼から隠れて地中に潜む黄金」という。それは「キリストによってのみ成しとげられるかもしれぬ」「復興と復活」であると言う。

彼は目に見えない領域を指示している。彼が意図しているのは信仰への誘い^{いざな}なのである。今、ただちにキリストの方を向くことだ。あのハンス・ホルバインの絵画から目を背けて、信仰へと帰って行くことだ。言葉を変えれば、己の内奥に唯一の至上性に充たされた世界を切り開くこと、その唯一の世界を目の前にすることである。それはつまり抽象性の領域に、彼と共に足を踏み入れて生きることを意味している。

Wikipedia

イエズス会(ラテン語: Societas Iesu)はキリスト教、カトリック教会の男子修道会。宗教改革以来、イエズス会員は「教皇の精鋭部隊」とも呼ばれた。このような軍隊的な呼び名は創立者イグナチオ・デ・ロヨラが修道生活に入る以前に騎士であり、長く軍隊ですごしたことから深い関係がある。現代では六大洲の112カ国で活動する2万人の会員がいる。これはカトリック教会の男子修道会としては最大のものである。イエズス会員の主な活動は高等教育と研究活動といった教育活動であり、宣教事業や社会正義事業と並んで活動の三本柱となっている。

イエズス会の保護者は聖母マリアの数ある称号の一つである「路傍の聖母」。イエズス会の指導者は終身制で総長とよばれる。現在の総長はアドルフォ・ニコラス師である。会の総本部はローマにあり、かつて本部がおかれていたジェズ教会(Chiesa del Gesù)は歴史的建築物となっている。略称はS.J. 中国や古くの日では「イエス」の漢訳が耶穌であることから耶穌会(やそかい)とも呼ばれた。

<http://dokushokai.shimohara.net/>

p577「あたしはただあんたを自由にしてあげたいばかりに、あんたのそばから逃げ出したんだわ。でも、今度はもういや！　なんだってこの娘はあたしを不身持ちな女かなんぞのように扱ったんだろう？」

アグラーヤ・イワーノヴナとナスターシャ・フィリポヴナの会見

二人の会見によって、アグラーヤ・イワーノヴナはニコラエヴィチを永遠に失った。この機微について考察することに意味があるだろうか。

二人のやりとりをみると、アグラーヤ・イワーノヴナには、ナスターシャ・フィリポヴナを完全に打ちのめし、彼女が「不身持ちな女」でしかなく、私たちの世界における最低の地位にある女でしかないということを、確信することがどうしても必要だったのだと思われる。それは相手が、ニコラエヴィチの前から身を引く素振りを見せることにより、その意図に反して、アグラーヤ本人をNO.2の地位に貶めたからである。彼女は会見の当初から「相手を極度に軽侮して、それを口に出して言ってやりたくてたまらなかった」から、「純然たる女性的な侮蔑」の視線をナスターシャ・フィリポヴナに投げつける。

そして見たところアグラーヤ・イワーノヴナの決定的な失言はこれだ。

p573「あなたがけがれのない女になりたかったら、なぜあのとときご自分の誘惑者を、トーツキイをあっさりと……捨てておしまいにならなかったんです、芝居めいたまねなんかさらないで」という侮蔑と宣戦の布告の言葉だ。

アグラーヤ・イワーノヴナはナスターシャ・フィリポヴナに消えて欲しいと思っていた。なぜなら、ナスターシャ・フィリポヴナ本人が看破した通り、相手を恐れていたからである。この恐怖は、ニコラエヴィチの愛情の特質に起因するものだろう。

アグラーヤ・イワーノヴナは、ニコラエヴィチの存在の特徴、その抽象性を見ぬいていた。彼が、誰に対しても等分の愛を振りまくことのできる存在である、ということを薄々感知していたのだ。そして子供であり無垢でもあるが、それ以上に現実的で常識的なアグラーヤは、彼女の人間的な当たり前の独占欲の故に、ニコラエヴィチにそのような特質のあることを恐れていたのである。

だから本来なら彼女は、ナスターシャ・フィリポヴナが静かに身を引けるように、その場面を自分がしっかりと確認できるように、台本を整えるべきであった。その力は、しかし彼女にはなかったのだ。嫉妬心と恐怖が、彼女の言葉と立場とを、激越な嵐の中に放り込んでしまった。

p576「あたしはあなたのことをもっとよく思っていましたの、もっとお利口で、ご器量だってもうすこしいだろうと思ってましたのよ、ほんとに！」〔ナスターシャ・フィリポヴナ→アグラヤー・イワーノヴナ〕

ナスターシャ・フィリポヴナのこの言葉がすべてを物語っていると言わねばならない。

レフ・ニコラエヴィチの精神的な死の意味

キリストの隠喩と預言

P666「しかし、彼はもう何をきかれても、すこしもわからなかった。いや、中へはいってきて自分を取りかこんだ人びとの見わけもつかなかった。」(レフ・ニコラエヴィチの最後)

P603「私はあのひとの顔を見つめていたんです！ もう朝のうちに、写真で見たときから、見るに耐えなかったのです……………私は……………私はあの女の顔がこわいんです！」(レフ・ニコラエヴィチ→ナスターシャ・フィリポヴナ)

ニコラエヴィチ自身がキリストの隠喩なのである。「白痴」は、もうひとりのキリストの磔刑の物語であり、そこでは共有世界に仄かに見え隠れしていた至上性が排除されるのだ。ただし、キリストは肉体的に排除されるのだが、ニコラエヴィチは、精神的に排除される。彼は関係性の世界から、抽象的に、完全切除されるのである。

一方ナスターシャ・フィリポヴナは肉体的に殺された。ロゴージンが直接の死刑執行人である。彼女の場合は己の失墜によってニコラエヴィチの排除を預言していたのだとすることができよう。この預言的な眼差しが、ニコラエヴィチの恐怖の原因なのである。

そして彼女自身の肉体的な排除は、ニコラエヴィチの精神を潰してしまう。つまりロゴージンは、ニコラエヴィチに対しても死刑執行人としての役割を果たしているということになる。ロゴージンの死刑執行の働きは、もう一つ、あのアグラヤー・イワーノヴナとの会見の場で果たした役割の中にも含まれている。レフ・ニコラエヴィチの「一瞬の逡巡」に耐えられず駆けだしたアグラヤー・イワーノヴナのために、屋敷の「扉のかんぬきを」外したのはロゴージンである。この共有世界に残るアリアドネの糸であったアグラヤーを失った刹那、ニコラエヴィチの運命は決していたのではなかったか。

ニコラエヴィチがアダライーダに、ギロチンにかけられる直前の死刑囚の表情を描きなさい、と言ったあの言葉にも、ナスターシャ・フィリポヴナの存在と同様の預言の意味があるだろう。あの死刑囚の姿は、これから己のもとにやってくる運命に従おうとする、ニコラエヴィチその人の姿なのである。

レフ・ニコラエヴィチの精神的な死の意味

復活について

それならば、ニコラエヴィチは復活することがあるのだろうか。

p673「物事に熱中するのはもういいかげんにして、そろそろ理性を働かせてもいい時分ですね。それに、こんなものはみんな、こんな外国や、あなたがたのヨーロッパなんてものは、なにもかもみんな幻影にすぎませんよ。外国へきているわたしたちにしても、幻影にすぎないんですよ」

〔リザヴェータ夫人の意見〕

リザヴェータ夫人の意見がこの物語を締めくくっているのだが、この言葉の意味には奇妙なところがある。

彼女は何について「幻影」だと言っているのだろうか。彼女が否定し、その存在を共有しながらないのは、彼女が「指さし」ている人、彼女の目の前にいながらも「まったく相手の見分けのつかない公爵」の姿なのである。彼女は「ロシアへ帰りたいが」、ニコラエヴィチを前にしつつ「ロシア風の涙を流してやりましょう」と皆に言う。彼女にとって、唯一の共有世界は「ロシア」なのである。それは何処にあるのだろうか？ それは、あの時、レフ・ニコラエヴィチが指し示した場所だ。

p517「ああ、渇きにもえるコロンブスの道づれたちに〈新世界〉の岸を啓示してやってください、ロシアの人間に、ロシアの〈世界〉を啓示してやってください、その眼から隠れて地中に潜む黄金と、キリストによってのみ成しとげられるかもしれぬ全人類の復興と復活を未来において啓示してやってください。」

「わたくし」の内奥に至上性を湛えた世界を切り開くこと、そこにこそ、「ロシア」はあるのだ。そこにこそ、逆説的な「ほんとうの」共有世界を幻想することができる、と彼女は言っているのである。

そして、この逆説的な世界が幻想できた刹那、レフ・ニコラエヴィチは私たちの前に復活を遂げるだろう。なぜなら、至上性の失われた私たちの共有世界では、レフ・ニコラエヴィチの精神的な死は、幻影でしかなく、至上性の世界こそが、ほんとうの人間、レフ・ニコラエヴィチが生きる、ほんとうの世界であるからである。

ドストエフスキーが構想する生き方には一貫性があるように思う。「罪と罰」の終局を思い出してみると、そこでソーニャとラスコーリニコフが共有する「愛」もまた、同様の生の姿を言い当てているように見えるのである。すなわち、「愛」という至上性を己の内奥に切り開いた二人は、それぞれの「わたくしの世界」を通じて、至上性を逆説的に共有しているのである。

了